

商店街活性化と住民参加のまちづくり

藤田 徹（労協センター事業団関西事業本部）

1. 前日の全体会を聞いて関心を持つ人が集まる

前日の全体会で異彩を放っていた筥崎まちづくり放談会の報告もあってか事務局の予想を超える人が集まる分科会となった。コメンテーターには福岡のまちづくりの仕掛け人である NPO 福岡の斎藤政雄さんもあり、今 焦点となっている「まちづくりと仕事おこし」というテーマを九州らしいおおらかな雰囲気語り合おうといった感じで分科会は始まった。

2. この分科会のねらい

先ず初めにこの分科会の主旨を全体で確認するところから始めた。

経済のグローバル化のもと進む市場万能主義、規制緩和が恐ろしい勢いで進む情勢の中で街の空洞化、失業、治安の悪化、人と人との絆の崩壊などが進行している状況をリアルに捉える場とする。

しかし、そういった流れがあるからこそ、それに対抗する魅力ある街づくりや商

店街活性化の取りくみが各地で生れつつある。そういった取りくみを交流し、まちづくりを担う協同の力と地域経済の新たな担い手を展望していく。

以上2点についての確認を行い、早速、報告に入っていた。

3. 報告と質疑

第1報告

梶山祐子さん（筥崎まちづくり放談会）

昨日の全体会での報告をパワーポイント使ってよりわかりやすく説明していただきました。

福岡市東区の筥崎地区に於ける JR 鹿児島本線の連続立体交差事業とそれに伴う区画整理事業の施工決定を契機に市民の立場から自由闊達にまちづくりを論じ、まちづくりのために行動しようと結成された団体が筥崎まちづくり放談会であり 筥崎地区の将来像を描き出す まちづくりを推進する主体の形成、の2つを行動目標に現在、多方面にわたる活動を行なっている。



平成13年には誰でもが集え自由に使えるスペースである管崎公会堂を開始、ここではコミュニティレストラン「カフェ万福館」を始める。

管崎公会堂ではレストランの他、携帯電話教室、ワールドカップ放映、夏の夜のこわ〜い話会、管崎ミニ商店街の出店など事業数もどんどん増え、新しい拠点が必要となってきた。

そんな折、箱崎商店連合会、高齢者生協東事業所と一緒に事務所を構える話が持ち上がり共同の事業として商店街の真中の空き店舗を改築して「きんしゃい公会堂」を立ち上げる。

「きんしゃい公会堂」では現在、「インターネットサロンろうれんなる」と「障害者まちなか学童ステーション ぼっぼ」の2つの事業が展開されている。現在、新JR箱崎駅の開業などもあり商店街に人を呼び込むきっかけとしてまちなか劇場「テアトルはこぞき」を企画している。

質問1. 地元商店主との関わり方はどんな感じか

コーディネーター

藤田 徹 (労協センター事業団)

報告者

梶山祐子 (管崎まちづくり放談会)

能美聡子 (徳力団地自治会)

竹内裕二 (まちのカルシウム工房)

長野裕二 (野津市商店街協同組合)

松尾孝治 (北九州青年みらい塾)

コメンテーター

斎藤政雄 (NPO福岡)

答え * 商店街のトップとの関係は割合とれているが、一般の商店の人とはまだギャップあり、徐々に信頼づくりを進めているところ

質問2. 「管崎公会堂」がつくられる10年前の活動はどんな風になっていたのか

答え * 平成3年当時は管崎の街の未来を考えるシンポジウムや話し合いを中心にやっていた

質問3. 活動資金はどうやって捻出しているのか





答え * カフェ満腹館売上げ月180万を目指している。その10%を活動資金としてスタッフの給与他に当てている。又、会費も徴収している(正会費年5千円)

質問4. 運営のルールについて

答え * 飲み会も含め決まったこと、街のために役に立つことは絶対にやるというルール
会議は月に1回、昼も夜もやっている、会員は現在50名

第2報告

能美聡子さん(徳力団地自治会)

小倉南区徳力団地は60年代後半に建てられた西日本一の公団住宅で賃貸2320世帯、分譲90世帯で中央に商店街があり、当初はザルからお金があふれるほどの繁盛振りだったそう。

能美さんご一家は職を求め20年前にこの地の公団に引越して来られた。しかし、栄華はそう長くは続きません。

周辺にスーパーが出来始め、80年代の後半から人通りが減少しはじめた。90年代に

入り空き店舗がではじめ、気がつけばシャッター通り。

その上96年の12月にはキーテナントの「スーパー」が撤退した。この冬ガラスが割られたスーパー跡とゴミや木枯らしだけが舞うゴーストタウンになった。

団地の人たちは買い物や通勤にも、商店街を避けるように通り過ぎていきました。自殺未遂・放火・そして孤独死が続いていきました。

どうにかしなくてはというせっぱつまった思いからスーパーの空店舗の貸手探しを始め、下郷農協さんの出店にこぎつけた。

自治会福祉部のメンバーがお店の運営を任せられ、慣れないレジにドキドキの開店となった。

(97年5月) 開店当初は大賑わいで何処にこれだけの人かと思うほどの賑わいでしたが、消費税が5%になり、医療費の値上げや不況のあおりでまたして空店舗が出るようになってきている。

そこで民医連の「おさゆき病院」と提携し、団地内の空き店舗後に「在宅支援センター」が開所した。

これらの経験を通じて旧態依然とした商売のやり方や仲間意識の希薄さ、住民のニーズに対応できていない店の不潔さ、商品の古さなど商店主側の問題が見えてくる。

又、「暮らしのアンケート調査」からは高齢化が進み少ない年金で家賃(約3万円)を払い生活していく大変さが見えてきた。

そういった中で、下郷のお店は介護保険の手続などよろず相談の場所になっており、団地の元気の発信地になってきている。お店の運営に携わっているメンバー6人全員がヘルパー2級の資格を取得し、地域から頼りにされる商店街づくりを目指して、くじ

けず頑張っている。

第3報告

竹内裕二さん（まちのカルシウム工房）

「みなさんカルシウムを摂っていますか」というあいさつから始まった。

人間にカルシウムが不足するとイライラの原因や骨粗鬆症こつそしょうしょうになるように、街も見た目は元気だが、商店街に活気がなく人間でいう骨粗鬆症の状態なのではないかという問題意識から「まちのカルシウム工房」というネーミングをした。

代表の竹内さんは国連で働くことを夢見ながらドイツの大学で環境土木工学の客員研究員として働いていたが、27歳の時に父親が病気で倒れ帰国した。

当時は若松が「何もない街」だと思って大嫌いだだったので、若松に帰らず、東京の土木関係のコンサルタント会社に就職した。そのうち、祖父母も介護を必要とするようになったので、30歳でやむなく帰郷。「仕事をどうするか」と考え、行き着いたのが、コンサルタント経験を生かした街づくりへの提言。「嫌いな故郷の街を何とかして好きになりたい」との思いもあった。

手始めに取り組んだのが、地元・浜町商店街の立て直し。1999年11月、商店主や市民、行政関係者40人を集めて「浜町商店街を考えよう！まちのカルシウム講座」を開いた。最初は変なことをしようとしている人物と不信の目で見ていた商店主も多かったが、とにかくとことん何回でも話し合い、ケンカもし合った、そんな中で本気であることをわかってくれる人が増えてきた。今ではケンカした相手の方が良き理解者、協力者になってくれている。

小学生と親を対象に「まちのコロンブス探検隊」を募り、街を発見する試みや「われら海岸探偵団」と名付けた「海岸清掃」をやったりしている。

楽しんでやるのがまちづくり運動の長続きのコツだ。さらに講師をしている商業高校では、授業の一環として、生徒たちが空き店舗で駄菓子屋を開いたり、商店主に苦言を呈する取り組みをした。

それから、まちづくり支援事業にも取り組み、市内の前田まちづくり協議会では「まちの健康診断」の実践指導に当たり、今春「カルテ」(提言書)を作成した。そのカルテを元に商店街のおかみさんたちが商店街マップ作りを取組んでいる。

これからも引き合いがあれば、どこへでも「元気な体づくり」に出かけたいし、まちづくり教育にも力を入れていきたい。教え子の高校生や、イベントに参加した小学生たちがあちこちで町を元気にしてほしい。

第4報告

長野裕二さん（大分県野津市商店街協同組合）

野津町は大分市から南へ30km、215戸、750名の人口、野津商店街もこれまで歴史、文化の継承やコミュニティの形成など地域住民にとって暮らしやすい街づくりに大きな役割を果たして来たが、人口の減少、モータリゼーションの発達、ライフスタイルの変化がもたらす近隣市町村大型店への流出などが拍車をかけ、地域の空洞化は今、深刻な問題になってきている。

長野さん自身の商店(米屋)も10年前、年間で9千万あった売上が5千万に半減している。又、1988年に164あった店舗が今年

84店舗と急減している。

そういった背景には「他の店の危機を知ることによって安心感を得る」ような連携意識の弱さや内からのエネルギーの少なさ、後継者がいないことなどに典型的に現れている多くの困難が野津町商店街でも存在している。そこを突破する6つの視点を考えている。

商店街・自治会活性化の取り組みを進める。

若手後継者グループ、若者の意欲喚起。地域福祉コミュニティのモデル化。

介護保険・地域福祉事業所としての事業化。

県立野津高校福祉課の存在意義の確立と実践的介護の場の設立。

町村合併による過疎を逆手にとっての商店街生き残りを賭ける。

空店舗の利用として宅老所の開設、福祉用具貸与のための展示場の開設、市民芸術家の作品など常設ギャラリーの開設、高齢者と障害者の就労の場にもなる共同出資による共同店舗の開設など55の店をシルバーコミュニティエリアにする構想を進めている。又、空き家を利用して、小規模のグループホームづくり、ケアハウス、グループハウジングなどをつくりたいという、夢をもって取り組んでいる。

問い 自分にとっての街づくりとは？

答え *自分の商売の防衛のために人の繋がりをつくろうと思ったことがきっかけ、まずは仲間づくりのために劇団をつくり、夏祭りにかけた。

問い 何故街づくりをするのか？

答え *商店街は死に体、地域が無くなるプロセスは人がいなくなり、物が

無くなる。その逆手をとって人をつくり、物をつくり、地域をよみがえらせたい。そのための協同の事業を展開しつつある。

第5報告

松尾孝治さん（北九州青年みらい塾）

仕事は薬剤師、みらい塾のそもそもの発端は北九州市教育委員会主催の事業を通じて集まったOB会からの立上げ。

北九州市40周年記念のイベントの企画から始まる。そういう目で見ると北九州市はネタだらけの街だと言うことが見えてきた。例えば、焼うどんは小倉が発祥の地ということで昨年秋、焼うどんの発祥地「だるま堂」の味を全国に知らせたいと焼そばで名高い静岡県富士宮市の焼そばと「焼うどんバトル」を小倉城天守閣前で開催。

さらに12人で「食べ歩き隊」を結成。あちこちと食べ歩き「焼うどんおすすめマップ」を作成、5000枚を配布した。「焼うどんは家庭のお父さんのお得意メニュー、ふんわりとした優しさがある」と評判になった。

また、子育て支援基金助成事業を活用して高校生を対象に「高校生みらい塾」講座も開催してきた。来年2月には「焼うどんスタジアム」も企画している。

活性化には多様な方法があるが、内向きの企画が多いように思う。結果、誰にも知られない。それでは外へ拡がらない。地域にもともとあるいいものを外へ情報として発信し、マスコミの活用も大いにして外からたくさんの人に来てもらうことが大事。

そういう意味で私達がやってきたのは商店街の外から商店街を活性化させるとりくみ、

イベントの成功が商店街の目を開かせるきっかけになっていく。焼うどんバトルはヤフーにも掲載され、大きな関心ごとになってきている。今後は企業とのコラボレーション、お店のマップづくりなどを考えている。

問い 活動資金について

答え *5千円の会費とイベント毎の協賛金でやっている。

問い 会員の年齢と人数

答え *22歳~39歳までの構成で現在33名の会員がいる。

4. 各報告をうけての斉藤さんよりのコメント

報告を聞いていて、大きくは2つの特徴分けられるのかなと思った。

1つは商店街の中からの消費者へのしかけをしている所(野津町商店街)ともう1つは消費者サイドから商店街への刺激をしている所(徳力団地やカルシウム工房みらい塾など)がある。

街づくりにとって最も大切なのはミッション「何故、街づくりをするのか」それぞれの報告者はそれを鮮明に持っている。

滋賀長浜の「黒壁」に先日行ってきたが、地元のお祭りを守るという目的に7人に仲間が一体となり、マンション会社の黒壁銀行の買いとりを阻止したという話だった。

ミッションと同時に大事なことは「まちのカルシウム工房」の報告に典型的に現われていた。それは成功した結果のイメージを持ってるということだと思う。それを持ってるとみんなのエネルギーになる。

結局、この分科会の主旨にある様に商店街の活性化は、ただ単に消費を活発にするだけにとどまらず、地域の生活や文化を豊かにする中心を復活させるという重い意味があるということになっていくのではないだろうか。

質疑応答をうけ、参加者の意見交換を行なう。

- ・行政との関係づくりをどう進めるかという質問には「自分自身が住んでいる街の町内会に参加し、地域の中に入っていくことが大事。(能美)
- ・「まずは自分が先頭にたって実行しながら、みんなに相談するスタイルが信頼を生む」「話しをしたことには責任をもち、逃げない」「公の場で目に見える所で行動する」又、商店街活性化のポイントとは何かという所では「地域の中の人間関係をつくり直していくコミュニティーケアの考え方が大事」(高齢者生協連合会片山)
- ・「活発にイベントを展開し、情報を発信していく」「商店街同士が見学・交流をし合うようにする」(センター事業団荒牧)

などの意見が出された。時間の制約もあり、最後に各パネラーから一言ずつコメントをもらった。

松井:若い人の参加が大事、ばかばかしくみえることでも真剣にやっていくことが回りを巻き込んでいける。

長野:商店街は地域の情報が集まる場、同じ時間、同じ空間を共有し、楽しく続けていくことがカギ。

竹内:街の活性化のアイデアがない方法が分からない。足を引っぱる人がい

るなど多くの悩みを抱えている。そういったことの接着剂的な役割がこれからのNPOに期待される。

能美：消費者である私達が行きたくなるような街づくりをして行のが私達の役割かなと感じている。

梶山：箱崎で子供を産んで育てたい箱崎のお父さん、お母さんが増えた分、自分自身も成長したい。

コメンテーターの斉藤

：皆さんの発言を聞かせてもらい、夢を描き、遊び心を大切に楽しんで形をつくることの重要性を改めて感じた。持続するパワーの秘訣は何よりも自分の街を愛することだ。

最後の斉藤氏のまとめのコメントの様に第4分科会各パネラーには共通して自分の街を愛し、それを形にしていく創造力ある個性的な方々が集まった。情勢に押しつぶされない協力の力をどう高めていくのか、それは、まずは1人1人の想いから始まり、そこを起点にして“協同”が広がっていくことを参加者の多くが感じた集まりだったのでないだろうか。